



近藤氏藏書

近藤氏藏書			
一	四	和	書
〇	六	史	門
冊	號	函	類

リ 5
6039
8



リ 5
6039
卷 8

大岡記卷第十六目錄



一 吉野之花見事

一 高野詣之事

一 於大坂御能之事

一 利家館御成之事

一 呂宋壺之事

一 伏見城取之事

一 醍醐華見之事

一 悠遊將軍日中再返之事

一 去依園寄事之事



藤忠
文庫

昭和十八年
三月三日
小田身代
長田反太郎
大岡記

Faint handwritten text on the right page, likely bleed-through or very light ink. Some characters are barely legible but appear to be a list or series of entries.

大内記卷第十六

吉野花御見揚之事



流南菴... (Small vertical text to the right of the seal)

文禄三年甲二月廿五日吉野乃花御見揚ある事とて大坂を立ち出せり... (Main body of text describing the '吉野花御見揚之事', including dates and details of the event.)

春山とて見下りてせし程より子午乃橋花園
橋田のたの山はく終る此松をしの後んをて青
公くそ海より甲

吉野山梢乃る此のいろく
たとろくせわう音志何音海流

又関屋乃る此中母く
吉野山惟とひ致とハなけまこと

こよい毛く此乃かけし屋くらん

関白秀源公

本といふれ葛路を音と見くのみ

分あぬ山乃喜れそてり那

右大臣晴季

梅ら本とれ梢乃ありきさき

うれく山残ふか魚致たり

中絶玄秀俊

ちりそよもよりや村まき吉野山

花を本つけ乃音とたろりく

実庵乃花也

准三宮道澄

吉野山本此中毎り関とて

色花といふるさし花を庵とて

三位は京去首

所多野やふれは海香と少り藤と

たひもふれはあはれ下草

紹巴

あけがのく香もやふらんりのこ

こころ木まんと花のけしき

昌比

ふんせぬれみえとりじり乃ら

びーえかふまき小あやと

大納言 輝次貞

白雪残まじりけそゆんで

おくれおりの花さうまゆ

中山大納言 親徳

よつらふ君よひうけくまゆくの

音野の奥乃ふれとこそ見え

右清の音 永孝

雪乃のりもまきれぬめ乃あ野とら

梢のまゆやうつ残縁らん

中納言 雅枝

しめ子う袖残もあせ

多野 山

猪一子丸み人城よりえく
かく短冊あそり其後ののち所仁王門と
規せりあく蔵主堂（御系泊浦）く書
利秀俊より様館再拜啓成立より礼
ありより御く主よりせ給り去在御結書
あり是より様館後醍醐天皇乃白皇居何
つげりより御清んまて今様御たつてん山殿更
し舟才丈山をいぬて世給ひて昔義経乃
あてりくおけりまけり吉山城と臨館と
あり西日御滞府あり佐の人とあ板左右

所書よりひく勅免侍進人あの子御や
あてり御く書成いたるよ小姓計結と
室ひく。法侯大まうとあし。自分乃花見
とあてり物しとて様育たつてく

二月廿九日 御款書

源五首和款

秀吉公

花乃歌
い流しと思ひとくり一巻花山の
花城より一巻見そめわらわ
不散花風 春風乃吹とも花は且さきて

流乃上花

志の心ありふり流けり
流津波下といたのより
梢乃花のさくらとわらうれ

神前の花

まはかて神乃あはれ
まはかて忍ぶや
乙女子の袖さくら
なまらちまのり花の色を

花乃祝

乙女子の袖さくら
なまらちまのり花の色を

関白奏次公

花乃祝

年月の甲子無一柳
花乃木さけし志り

不散花風

かき多てなましく柳も咲
花よしとる春乃物風

流乃上花

みる内は花乃志の
あはれの花のあはれ

神の常花

ちりやう神やま
くさねるる代乃

花乃祝

花の上の心を
右大臣晴季

花乃祝

いそぐ花くさけと
待わら花と又

不散花風

やーびんはいはくあーし

流り上の花

まのろうめあーし
花乃香りりり 送るやまーせ

神のお花

咲つて色上より落くも好い
まのよせうすく流のさーし

花乃流

人さるあそんも年や神位の花
花乃志るいよあぬさーし
人は流く子年乃ける流路り
花を若をぬかけをさーし

檀大納言親總

花乃流

田時にさーし
およりり花のうーし

花乃流

さそりさーし
花よみさーし

流り上の花

花乃流
なまのやさる花をぬらさ

神の流花

なまの流花の志るさーし
まのいんえ大官人乃神位

花乃流

神乃流
後ーし
これの子年も君さーし

控大納言 輝夜

花の移るい
 かけたるさき雲井花よみうの
 山とさあけぬてーりれ
 霞散れし吹くくひんあや
 と風よさつぬ喜の山とせ
 志守とくみおこりたつ花のよ
 と風の梢はつたさう舞
 喜はなれぬ袖ありくくのよ
 花よみらる 神のひらき
 色も香も留るぬ花よみれ
 花の移る

花の移るい
 石散花風
 花のつるま
 年くろき毒の初若うのこ
 まらうとあもすちか神垣

あ代乃喜哉 立たなましくんむ
 大納言家康
 まらうあつ花も多喜哉 影しそ
 咲やまの喜ぬ乃と
 咲花や散るーと思ふ西舞花ハ
 心あつた喜乃 山風
 花のつるまより花も三つや
 年とさきさの志うは
 年くろき毒の初若うのこ
 まらうとあもすちか神垣

美乃祝

君代を子とせの妻も美乃祝
ふれよちりきりつりきりつりきり

松中納言秀保

花の彩

年くよまても心ひくしは美乃祝の
ふれよちりきりつりきりつりきり

不散花風

けつたは風舟心をほくともれ
美乃祝の山乃花をうくを

湖の上花

ふれよちりきりつりきりつりきり
龍り落るよ花の志うあこ

沖のお花

みきせの美乃祝の山乃花をうくを
花乃美とに神うきせれうら

花乃祝

天地のめくみもつらき君代を
美乃祝の山乃花をうくを
松中納言秀保

花のねん

みよれ花のうりともぬ人よ
うせくやとのともうらうら

不散花風

うせくやとのともうらうら
水よ花やらうらうらうら

滝の上花

水よ花やらうらうらうら
美乃祝の山乃花をうくを

祇前の花

花乃脱

花乃脱

不散花風

花乃脱

芳野山奥の文井よとてはく
すもは花乃脱きさりたり

君の代はきりしかりきりし
花よとせぬまは書る候

冬後中納言秀家

まよひにやゆけそみよー野は
むれあつとまらそぬぬ

風吹と花よとけよ芳野やま
らふむしよのまのあはれ

えり乃花の白ひもさるよら

花乃脱

花の脱

花乃脱

花乃脱

花乃脱のまを脱のまを系
花よとけし祇のまは花乃脱
花乃脱のまを脱のまを系
白あよとけし山を脱のま
ちと脱のまを脱のまを系

冬後中納言秀家

花乃脱のまを脱のまを系
花乃脱のまを脱のまを系
花乃脱のまを脱のまを系
花乃脱のまを脱のまを系
花乃脱のまを脱のまを系

滝のふれ花

祢乃前花

花乃祝

花乃祝

ふれ花風

ちから花み流乃白波まじりて
雪りこみぬの雲そとれぬ
ちからやうる祢乃くみよふひてそ
くまふんうら花とこゆ水
うれ山花乃さりの久ききに
まのよまひかこらとわさか

た近清中ね雅技

花乃未だ花りちるまぬより此と
あのみぬふうつせーれ
ま風もあわれやけりりなふ

流上花

祢乃前花

花乃祝

花乃祝

花をさそとぬみより花はく
滝津をたふらうんて右遊山
あつむるあぬ花乃しうあ
祢乃まよらう一柱てやうー乃山
うきふとそふ花乃まうさ
たふぬまの代のまられは望みぬ
まぬをまてんゆき野の山

右兼門替永存

まぬらぬ町かろくて梯をれ
まろて来てらんこのうら山

不散を風

遊れよの花

神の前花

花の鏡

花の鏡

山崎もあかりてやそあはれん
 枝もうらやな花のうらや
 水と乃むれあしきふゆのつ
 とゆやふゆのふゆは白糸
 咲花よぬさとりそく神にや
 七葉ふりふり喜れや人
 花よめくふりそくしりく
 けきせぬまにふゆは白糸
 信長政宗
 たるくはあはれぬはゆき

不散花風

遊れよの花

神の前花

花の鏡

ちりほりてはゆきふゆは白糸
 とゆは白糸の梢もあはれん
 枝もうらやな花のうらや
 水と乃むれあしきふゆのつ
 とゆやふゆのふゆは白糸
 咲花よぬさとりそく神にや
 七葉ふりふり喜れや人
 花よめくふりそくしりく
 けきせぬまにふゆは白糸
 信長政宗
 たるくはあはれぬはゆき

唯三宮道澄

花乃ゆゑ

不散花風

花乃上のむ

花の前花

花乃祝

花乃まらりて咲くはあまのつれ

うら花は様あくるはてはらん

花は花はなやうにや花は

らうに花の風はなをりひ

るは花は乃あまはらなやと

るは花は花はなは

花はなはなは花はなは

はなはなは花はなは

はなはなは花はなは

はなはなは花はなは

入道前田大信常主

花の移り

不散花風

花乃上のむ

花の前花

花乃祝

年月の移りしはみらぬ花は

奥くわくたう花をとらな

おまの君りやあは

を吹ぬ花の風はな

ひはなはなは花はな

花はなは花はなは

らなは花の風はな

はなは花はなは

あまのつれはなは

喜のたふとい花したえせ

法華全集

花の移る

おろけ我老らくれ花しうれ

不散花風

君り子とせれ喜毎子こむ

花の移る

主くも霞のうられ花のりあ

不散花風

ちるぬいせ思たなり母そか

花の移る

右くも花は津津はよ落は

不散花風

花ハみあかしくおいてあそた

花の移る

ななく喜のちり母しつ花標

不散花風

ふれ子みせら神くもあうら

花の移る

ひと喜のあ枝標り顔のうれ

不散花風

あそあハさうりにすうれ

花の移る

法眼紹也

不散花風

花よきよハたすあぬ喜毎

花の移る

おのひやりあそらうのうら

不散花風

所和山喜れ母しつ花よき

花の移る

ひと喜を喜れ風やまうん

不散花風

鏡のともあさかぬれ喜野

花の移る

あれまらうら花のあつけ

不散花風

板むしあのみられ色しやま

法華全集

花の祝

あけのつらふは花やさくら舞
くそつらふ花の奥は山搦
花乃さうりハ義代さんてり

法眼中已

花の歌

善好山善の本なら花よあつ
花乃さうりハ後一やうきや

不散花風

咲花のらうもも足さぬ御善好の
山の外ややう後ハさくら舞

流の上れ花

よりの川ちりりさ善の流はよ
花乃雲さくさくまてそり

神花の花

心なまふ人やたさくん花のま
みや木まらりなるかろりの山

善乃祝

善野山子せ乃花もまてつ
君うようひは花もあはるん

法橋昌元

花の移る心あはる海に送來つてまを奪

花やさうりハもさうりの山

不散花風

善好山守す咲花も新てや
花乃まわひはあけ海うらん

流の上れ花

水上の花咲ふは流流糸色

くさくさお井とけりおを

津の前の花梅ろりん又としさうくにみゆり

ひさしおまきは花しあうく

花の祝 その上さくらを織思ふひを

かみ織りすまの花あみり

津秋の舎れ翌日山と花を色吳たりけき

お葉せぬをまけ葉うの花の色

あはれまうくも代もあう

おまうり文のものと

折よあま今をさくらに花のつら

やま井よりく梅木のうや

山松のう勢やあそく雲から舞

うけよ梅乃ちるより

関白秀治公

ひさしにからをもを散ハ咲

あより梅の花のみり

右大臣晴季

又を若しあまそくみむ

らう梅あまはさくら

は原合家

らまの文様本は文意花よましく
なみ成奥少くまきやたの祈ん

上乃意と文とて秀吉云

ゆくとおのまゝあや入あひ意
持ちそ花のうらみ見たりうせ

同 中細と秀俊

いそまゝあや成くりまき野山
本のもの毎乃花の色ひり

花の御覧
花の御覧

○高野詣之事

三月に秀吉を導き高野へ御登りしに
御青巖寺に
所寄宿海に二親を具のため焼香い
くにも慈よゆはし給ひたりかくて一山八千人乃
僧徒は名高の御母堂の御志にて八本海に法
門にたり。而考ゆ之に甚くは浅奥院へ糸詣し
たす。毒苔埋えは方々之塔は朽るもあまも
又新しく立派な文も。そハ教をよむの悟の曠然
をりあつがし。そまき祈の御あまのあま何
ともおのひくまの御影の御影も清真

如平野の松風は山に或清む愈く美しく清く有り
 寛く園くしと云ふ。殊縁なり。雲地うりて感
 多ひつゝ。金堂大塔と仰おくりたり。まことり。金堂
 院大坂より及びいけさの吾登山と云。幸事也。再
 真ま之と云ふ。八木一万余石宛に早則木食
 興山上人清を有り其法及びひかり。四日乃其室
 ぬんと度出束作り窮極の叢御能遊し一山
 乃高徒より世学同之。若然勉免むと也。其旨
 役者之者有は觸之と信出と禮し。木下守母
 守り人喜之。夫其外役人せに。後一と。八人百之

未のより。まきと教寺に於てあり。と日ハ一天
 小寺もなしく四方に同じく有りて。いへきと屋
 りなき。何れも役人を弄。是より若くは又とく
 凡そまくり。一山乃下結めつ。こは若くは押
 合門の外より内に入り。と。せきあ。ま。かん。め。さ
 へ痛む。ぬ。笛乃移り。ま。す。の。め。さ。け。ま。か。た。と。志
 けり。うら。うら。御能初り。け。う。ふ。事。外。に。出。來
 け。神。の。り。又。屋。よ。お。さ。く。け。ま。か。ん。人。皆
 真。さ。め。て。く。り。抑。さ。り。野。山。の。若。り。笛。大。鼓。は
 二。大。師。乃。制。禁。せ。一。向。左。極。之。ゆ。め。り。り。

抑々^ニ治^ルぬ^ハい^ハ不^ニ意^ナかり^ニ事^ヲを^ナり
又或曰^ク也^レ在^リて^ハ一^ニ能^ハ成^ル付^ク見^ル人^ノ
一^ニ遊^ル其^ノ多^ク足^ル枝^ノ子^ノう^トと^モ智^ヲ
物^ヲなり^ニ器^ノの^中一^ニ賢^ノ智^ノの^智ハ^ハ大^ニ能^ク
て^ハ欠^ル事^ヲを^ナり^ニん^ハ

○お大坂新橋御能事

ユラコホツケウ 播別

同二月十日有之坂中丸におおく。由已^ハ播^ル人^也
新作の謡^{カク}多^ク花^ヲ見^ルる^ハ多^ク集^ル存^ル的^ノ智^ヲ集^ル回^ル
七條は^ハあ^ハ数^ノ人^ノ志^ハ八^ノ郎^ノは^ハ住^ル疎^ノと^ハ何^レ一^ノ
と^モ通^ルく^ハ彼^ノ作^付。さ^ハ傳^ルく^ハ受^ル。さ^ハ流^ル。御^ノ能^ル遊^ル

一^ニ中^ノか^ク人^ノ見^ルを^集め^テせ^ル事^ヲし^テん^ハも^ト也[。]
あ^ハ事^ノの^中ら^ハ人^ノ志^ハ二^ノ番^ノ衆^ノ人^ノを^集め^テ物^ヲを^集
た^リと^モな^リに^依り^テ出^ル来^ル一^ニ傳^ルる^ハ事^ノ一^ニ疎^ノ
去^ルと^モ御^ノ能^ル也[。]と^モな^リ

浮^ル日^ハめ^テ余^ヲを^集め^テに^威を^封一^ニ事^ノ外^ニは^ハ住^ル
や[。]と^モ傳^ル一^ニ傳^ル一^ニ事^ノ曉^ル一^ニ君^ノは^ハハ[。]
あ^ハ事^ノつ^レま^レた[。]あ^ハ事^ノの^中才^ハ藝^ノと^モな^リた[。]あ^ハ
ま[。]其^ノ排^ルも^ハあり[。]一^ニ事^ノ外^ニは^ハ住^ル一^ニ才^ハ厚^キ
人^ノの^中何^レ事^ヲも^ハめ^テた[。]あ^ハ事^ノの^中一^ニ才^ハ厚^キ
時^ノと^モ味^ヲあり[。]け^レと^モ見^ルえ[。]と^モ心^ヲ育^ル。

人々ハ羨望^カを^シて^ハ知^ラざ^レば^シ...

...

○利家亭^{リケヤウ}所成^シ之事

利家親^{リケノチカラ}亦^モ奇^キ利家^{リケ}多^クく^シて^ハ...

相^コ。意^イ度^ド有^リ旨^シ演^{エン}況^{キョウ}...

演^{エン}況^{キョウ}之^ノ因^{イン}乃^ノ有^リ...

一^ノ六^ノ日^ノ大^{ダイ}飯^{ヘン}...

一^ノ目^ノ様^{サマ}...

院^{イン}敷^シ所^{シヨ}成^シ...

院^{イン}敷^シ所^{シヨ}成^シ...

右^{ミダリ}ノ列^{レツ}...

初^{ハツ}日^{ジツ}之^ノ進^{シム}上^{ウヘ}

一^ノ所^{シヨ}太^{タイ}刀^{トウ}...

一^ノ所^{シヨ}馬^バ...

一^ノ志^シ...

一^ノ所^{シヨ}少^{シウ}袖^{テウ}...

一 純子 二十卷

浄散を永昌越中にも羽柴肥前も。浦生飛騨守加冬羽柴孫守島母羽柴即左近の射毒左近大捕也。是又東山左近浄成に記録し悉くあはれおろしむるなり。浄酒夏さぬく乃真あり。幸あり八郎九郎二番舞一後おろしや。あまもろしむるも出来たりて浄を交車に外なり

翌日九日進上

一 浄腰物 香光

一 浪子 十枚

一 緋 二百七

利尻長良に面を三十一人右刀折紙を紙乳ト上し。則浄をせしむるなり。是日浄機嫌を還浄せられしなり

秀吉云有馬浄湯治事

卯月廿九日浄湯治に付る。是にこれに如く九人枝名別。浄湯乃のすくまらん。浄湯送る中。方より機物を殺し。有馬中。此有馬二百。湯女は小五十。奥袴下。皆中。此

一 純子 二十卷

浄殿より永長越中より羽柴肥前より浦生
守加多羽柴孫守島守羽柴島左衛門尉毒左
大捕也。是又東山後浄成に記録し
あふ所わらうりしをいへり。浄酒宴
乃真わりの幸あり八郎九郎二番舞一後
や一あまをいへり。浄毛出集ゆりて浄
車にかかり

翌日九日進上

一 浄腰物 音光

一 浪子 十枚

色色

一 緋 二百七

利家長良に面して二十一人を刀打紙とて
戸上りし。則浄殿よりききし。浄殿
機嫌よく還浄たされしなり

秀吉公自有馬浄湯治事

卯月廿九日浄湯治に付し。是に
九人杖百列。浄殿よりききし。浄殿
道中よりし。浄殿よりききし。有馬
浄自二百廿大湯女たふ五十美下。浄

あまのついでに目出らん。お月二十日ありら
成まり

呂^ル呂^スのついでに壺^{フネ}の事

泉^イ別^サ増^サ津^サ菜^サ屋^サ助^サ右^サ主^サの事。町人小琉球^{シウキウ}呂^ル

文^文禄^禄三年の夏お波^ハ文^文禄^禄七月廿日^{チチニチ}御^ミ初^{ハツメ}の事

比^ヒ波^ハの代^{ダイ}友^{トモ}右^{ミダ}田^タ主^ヌ助^サの事。九^ク歳^{サイ}者^{シャ}の事

唐^{タウ}の傘^サ蠟^{ロウ}燭^{ロク}千^チ挺^{テイ}生^{セイ}の事。麝^{ジヤク}香^{カウ}二^ニ疋^{フタ}上^{ウヘ}の事

涉^{セツ}礼^{レイ}の事。則^{ソク}真^{マコト}臺^{ダイ}の事。海^{ウミ}月^{ツキ}の事。半^{ハン}外^{ガイ}の事

横^{ヨコ}煙^{エン}の事。西^{セイ}丸^{マル}乃^ノ廣^{ヒロ}なる事。垂^{タリ}へ流^{ナガ}す。千^チ宗^{ソウ}易^イの事

あまのついでに。上^{ウヘ}中^{ナカ}下^{シモ}階^{カハ}の事。代^{ダイ}と付^{ツキ}を

是^{コノ}札^{シラ}と押^{オシ}所^{トコロ}を。向^{ムカ}ひを。わくよ。す。執^{シツ}之^ノと

紋^{イタダキ}治^チあり。後^{ノチ}に。丸^{マル}乃^ノ廣^{ヒロ}なる事。九^ク乃^ノ後^{ノチ}作^{サク}の事

代^{ダイ}付^{ツキ}の事。文^文六^{ロク}日^{ニチ}の事。小^コ恙^{ヤス}の事。三^{サン}の事。あり

と。代^{ダイ}友^{トモ}右^{ミダ}田^タ主^ヌ助^サの事。葉^{エフ}屋^ヤの事

け。是^{コノ}の事。白^{シロ}の事。代^{ダイ}と付^{ツキ}を。丸^{マル}の事

是^{コノ}の事。紋^{イタダキ}治^チの事。金^{カネ}子^コの事。乃^ノ廣^{ヒロ}なる事。助^サの事

あまのついでに。代^{ダイ}友^{トモ}右^{ミダ}田^タ主^ヌ助^サの事

雍^{ヨウ}列^{リョク}の伏^{フシ}見^ミ殿^{テン}下^カ右^{ミダ}田^タ主^ヌ助^サの事。湯^ユ定^{テイ}の事

文^文禄^禄三年正月三日伏^{フシ}見^ミの事。以^{ヨリ}城^{シロ}の事。可^カ以^{ヨリ}成^{セイ}る事

口^ク末^{マツ}

普徳をり河をさす軍一かたきとさる一とひ
 へ。坊向石田をさすにさる由ひ一十三人志願
 付よけさる。さるを大人撰出さる。一かたき
 引河内を。勝川を。前を。仍。後。河。水。野。地。助
 石。尾。多。普。徳。村。中。貞。右。忠。の。村。也。お。人。の。事。り
 者。一。役。人。九。二。月。朔。日。小。控。伏。人。三。名。あり。わ。ひ。の
 ち。に。上。せ。常。音。五。守。あり。少。事。と。さ。る
 各。も。り。廻。文。よ。多。ひ。お。人。の。普。徳。を。り。と。さ
 紋。引。流。さ。る。伏。人。普。徳。の。後。に。中。村。付。人
 して。入。物。大。目。深。と。坊。向。石。田。七。名。あり。と。さ

瓦
 疑
 尾

お。後。用。さ。る。と。さ。る。と。り。け。り。屋。う。ふ。ま。さ。る。と。さ。る
 たり。一。お。六。人。の。事。大。是。の。事。ゆ。あり。と。さ。る
 大。小。知。小。見。と。身。と。心。莫。た。や。り。と。普。徳
 依。り。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る
 是。不。お。付。の。後。の。後。一。役。人。の。帳。と。さ。る
 面。一。信。元。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る
 後。一。お。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る
 見。事。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る
 押。伏。人。の。後。地。の。南。の。河。川。の。事。と。さ。る
 川。の。事。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。と。さ。る

町より遠く引廻し。賈買乃使いとよむまひ。東ハ
ひは河の端よりまきこむとらるる

らるるま花れとらめなりあれ

とち辰巳より引廻し。善山城と聳波徑

路松相生辰つとより。其洞は醍醐寺より遠

寺眺種と貢ととみぬ水引けき。傍若撰

る後一少とらるる。則洗探の獄とる侍ある

なり。とちわらして三宅ととる山保つる巻

松契と吟し。東とる河橋のこまいやまい

一麓木れも院三十三の札札紙の引執考堂
あり。此札款と考より。

東とる月紙とむらも取りも

字路乃川紙ままの志は

又後せ八期日しをいと月と。おく川をこも

とらるる。千名あか。こまし。まきより。卒

鳥院。庭乃芝塔之。時。少。取。取。字。路。お。ら。か。ら。の

庭。ま。ま。の。月。月。し。見。乃。物。月。も。ま。ま。の。ま

ら。ま。お。ら。り。せ。志。西。八。樓。山。崎。相。河。は。二。口。長。に

ゆ。ら。く。と。て。松。乃。上。下。ま。浦。波。帆。漁。村。文。照。り。向

くろ真府君乃詠を信一責と伏見よむわく代
款人よるえとける中よ津制製よりんそ月文のやを
西のり

しそて見と玉乃菫も何のまじむ

月のこやこれ新まうを代り

めい種とさゆくの風京と云屯雄乃方角多
と云城あよおほ一宮めくまけつも又石置平

評曰めけ多系徳り一おとひ考よりおがさま

けつと時よよりとをさ出ま徳りうもや云下

中徳り一何い大坂今後よちうくつ一何い

取楽日かハをさねる福麻もて志くぐ人徳ひ

てよると伏見を城墾よ定めくまじ一

いとかりう一宮よそ中後を何よ徳

すり事終く沼屋とへ一及たれぬさかかん

文禄三年二月初はより方人え志創やく醒

醒し科比穀山雲母坂より大石をいおと事夥

一伏見よの堀善喜子勢を多く掘せけり

せきのふまよりうりく見舞一うぶとらぬめ

中しやえおろりなりそお材木守本らたを

ち依の衆といく大木成伐置けきか又の年乃

二十六年

夏の傍ゆよとのつら信かぬ。城子天公も助成し
うよやと頼もよかり。あまの御心お執りや
周の六人ありの加増え地恩賜をけし。八傳
國と急くしんと柳 芳ともしつとをまゑる
勅悔急る。年月も累り暮る。石垣二重三
重出まげし。いづれやの巻をまどまきく。地
事けはばよ急なり。山下のいさよ二十丈よこ
と瓶と徳本と植まう。枝と争ひ深しのごとく
まき柏生まふ。しし中よ。塔の蔭とまき
号。号文所古今す。これ津橋あり。朱光古帝

傷磨守。宗珠。宗悟。紹。瑞。り。同。と。千。宗。易。易。水。向。之。道
珠まど。海と。引。合。を。中。の。宜。一。に。付。沙。法。一。は。へ
し。と。説。信。り。し。里。よ。八。河。着。の。中。ま。よ。西。五。よ。よ
二。五。よ。よ。よ。い。す。さ。る。屋。を。ま。け。を。と。ち。り。面。く。り
津。着。を。お。下。茶。を。た。乃。講。人。浦。し。く。り。り。團。炉。裡
孫。も。河。着。な。る。ふ。傍。く。焼。火。な。と。相。一。結。ハ。洞。衣
吳。着。撥。高。て。く。り。け。し。い。ち。も。定。よ。後。ぬ

[Faint, mostly illegible handwritten text in a large rectangular frame]

大層記

○醍醐之花見

醍醐
本有
太向
三字
今
與前文
密着

史惟白髪ハ貴賤を不^コ分^ク月ハ雲と不^コ除^ク花ハ風と不^コ厭^ク死ハ河成^ル釣せぬ^コ羽^ト目前^ニありハ^コさ^シ喜^ハハ政^カ所^ニ離^レ離^レ乃^チ花^ト見^ルき^ニち^チ懐^ク懐^クの室^ニを^シか^シる^{コト}女^ヲを^シめ^ルハ^{コト}年^ハさ^シ喜^ハハ合^セ胸^ノ霧^ハく^ク一^ニ葉^ハ一^ニ葉^ハ在^リ成^リま^シせん^ト思^ハひ^テ寄^リたり^ハく^クま^シと^シ酒^ヲ善^ク院^ニ言^ハひ^テ被^レ作^レ談^ハ十^ノ所^ニを^シ更^ニ一^ニま^シ所^ニ傳^ハり^ハお^りま^シさんと^シ中^ニく^クる^{コト}所^ニ親^ク色^ヲま^シり^ハさ^シく^クハ^{コト}香^ハ阿^ノ南^ノや^ハく^ク政^カ所^ニ寄^リ傳^ハり

してあましく此日救世樂レ申すんとして厄者
 慈とまつく作らまレ。三月十日の醜レ願レ志
 花見へ借されらん政而後も且物あえさレり
 一作へと宮中から別孝慈をまレり侍りてかレと
 早と一レの二入あレりレき幸たさレくとレぬレき
 一このあまりよぬ文と心作とらレは。
 一孝とよレつせはけまレたレらレまレまレあレひ
 一このぬとレしレあレひレよレまレらレれレくレな
 一このせは誠レまレのレ一志乃花子のもレさレり
 一この家乃花をたレらレりまレまレ越レくレくレ侍レり

けりあましくぬれさレいレたレてレたレくレな
 一このせは局くもレりレつレきレくレらレりレ侍レり
 一この慈とレだレんレのレしレ志レまレ同レ母レらレりレ
 一すレせんレ申レおレきレくレきレ母レ同レとレあレを
 一このりレくレいレ。孝慈をレ早レとレらレんレまレりレまレ
 一このちレらレりレあレてレくレくレトレしレ

三月十日

お母さま
お女

か
く
く
く

醍醐御喜清之先

一 三之宮院少破之西院にてか徳理也大破なり西
 新儀子之由一たつて下もつてつて
 尸付し也。

一 院外五十町四方之町より二十町流るる西に立り

一 狭炮之者も重かしく妻成少治一尸

一 伏見より醍醐へ至るに乃多色も塚を結せ

一 て尸事。

一 寺に高札と歩くと破壞之西ありて之破

一 院内院外掃塗念入て尸付し事。

一 振舞場も所美洞澤より其之事。

一 百姓之下再性還之臨人多く建武様子に在

一 之事

右密て尸付者也

長長之年戊戌

正月廿日

法台院吉徳正

浅形陣正少彌及

増田右衛門尉

石田治平女補後
長束大藏大補後

醍醐越前守ヨシカミを多しと云ふ事

大津宰相 攝政左衛門守 増田右衛門尉

右三人として傳之る下みざるかりき事なき

局よりお計之

想梅之内へお入る事

守中守補守 中は式部大補

右五人として人の撰之所用人之外一切お入

信の事也

御幸の事どもかりあひつて一肯かくゆん 秀吉公

名を之りて一何しなれそえん御幸の

花のむしにうらさきく

本食真上人

美代とすわ御幸代 山さく

杉よ小雲乃多色紙えつ

とゆ人統しそまら

御輿之治事

一番 政所後

中か播磨守

田中守守之補

二番 西之丸

本下周防守

三番 松之丸

石河掃部助

橋本河内守

石田才三

四番 乙之丸

平塚周備

大田和久

又番 加加久愛

利家之
息女

河原左衛門尉

吉田孝俊

六番 東御方

但利家之
女中

三宮院はれひて。御成ましくしてさうそのの

法持まじりけり及夕日ありしやうきとおれ
この所事ゆりおし院ま右之山へく侍衆
かありけり花やうの手本おひたり各男
おひのわきま屋うたり志ましくしきまされ
まう寸とまゆりしきまより奇し乃若花や
乃花園まて道乃左右小塚城まきり又のトシ腰子
のましまくまうらトシ考吉公又子まお上之トシ腕籠か
ちいしくいとまづうたりまきまトシ人其のトシ行家まハ
何しぎふにやとおもひれてトシ整たりトシ持麻由ま
南ら乃精守たりとトシおひそくうらトシ左まのトシ持麻

堂あり。右より左に定れ塔はあり。橋あり。ぬ法
木もそ。あつら地うりつ又をへら。いも。えん。さ
く。き。音。これ水落あつく。清き。流の末く。魚
乃遊ひたり。つま。せ。の。さ。な。く。な。る。を。い。は。ん。
て。高。樂。あ。つ。ら。ぬ。古。さ。石。の。橋。う。指。木。と。欄。干。
ま。き。の。ら。い。い。の。つ。く。山。海。子。事。是。く。寂。莫。
たり。吾。ま。か。は。ら。ひ。半。ち。け。む。任。家。ま。り。う。り。
在。の。う。き。事。と。ま。ま。は。く。毫。子。七。年。の。あ。る。
と。悔。も。冥。理。と。ま。も。え。く。た。ま。石。橋。の。た。ま。
あ。く。い。は。い。海。の。た。ら。堂。う。り。蓋。田。サ。お。い。下。城。使。

アと。一。て。茶。屋。と。い。ま。一。秋。と。い。ま。り。茶。下。い。
茶。又。ち。一。なり。二。三。町。山。上。一。あ。の。谷。も。た。右。
つ。咲。も。あ。ら。す。教。も。あ。り。せ。ぬ。花。あ。ま。い。して。
冥。披。を。ま。る。い。わ。風。香。を。吹。さ。り。一。く。温。回。は。
と。あ。る。き。と。い。ま。も。さ。く。さ。ら。と。り。あ。り。あ。り。
い。は。く。中。一。
聞。説。醒。醐。花。世。界。見。来。此。如。雪。乾。坤。
又。有。人。云。あ。り。う。下。あ。ら。ぬ。花。の。さ。ま。
山。下。り。あ。り。同。い。あ。ら。ん。
と。あ。ら。ん。よ。う。り。う。り。

上から下のくくを果屋にうらみえありて
 日よらの端より入すくねとくねとれれ
 しく花よ戯き少くやと南の懸きよ心
 若ららまきまよあそみえよけい
 仙洞よもきく風をくあもくまき
 花をみくく舞とく。庭橋中納まきと物使よけい
 さきくく。持家前と清花のわくくもまき
 く使まよせくまきく。御供よあわね候
 大更。再東家の懸くく折作地砂地盡其
 負。若酒よかかえれ菊洛庭地ゆふ。天那。辛野

赤いひの僧坊酒尾の道。兜持多く煉江川酒尾
 持きり院内よ充て院外よ澄みくり室よ門前
 市よまきくく。さきくく。のまきくく。俗
 云物多くやと思われく。若下孫平くあ
 小松抄の大本。推捨地。起東敷中本。あつく日
 新とあわ地まき。新産報。是と奇なりと候
 つ。茶屋を建置物まき。茶具まき。茶
 くとまきく。若下入よ真。まき。二番よ小川
 ち能守茶屋を営く。是ハ前乃あ人よ事替
 手のおりたり事。まき。三回世問よ何

ありさうやうきして垣はよきと云ふに、先ぞこ
うたまり、^新城ささげ、幕^新毎^新同とあまご、あま
まくら、ぞもみ、^{ヨウ}方よ、い、^{ヨウ}家た、く、^{ヨウ}作り、ま、^{ヨウ}
やうき、乃、^{ヨウ}世、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}一、^{ヨウ}者、^{ヨウ}た、^{ヨウ}い、^{ヨウ}茶、^{ヨウ}屋、^{ヨウ}と、^{ヨウ}云、^{ヨウ}抑、^{ヨウ}
茶、^{ヨウ}鼻、^{ヨウ}あり、^{ヨウ}只、^{ヨウ}湯、^{ヨウ}を、^{ヨウ}補、^{ヨウ}ん、^{ヨウ}た、^{ヨウ}ら、^{ヨウ}と、^{ヨウ}及、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}つ、^{ヨウ}ら、^{ヨウ}よ、^{ヨウ}あ、^{ヨウ}下
び、^{ヨウ}あ、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}う、^{ヨウ}一、^{ヨウ}か、^{ヨウ}く、^{ヨウ}一、^{ヨウ}ゆ、^{ヨウ}一、^{ヨウ}て、^{ヨウ}く、^{ヨウ}坊、^{ヨウ}の、^{ヨウ}上、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}あ、^{ヨウ}や、^{ヨウ}つ、^{ヨウ}
ま、^{ヨウ}者、^{ヨウ}人、^{ヨウ}と、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}言、^{ヨウ}川、^{ヨウ}家、^{ヨウ}仁、^{ヨウ}と、^{ヨウ}心、^{ヨウ}百、^{ヨウ}く、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}の、^{ヨウ}風、^{ヨウ}流、^{ヨウ}を、^{ヨウ}畫
會、^{ヨウ}と、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}の、^{ヨウ}つ、^{ヨウ}各、^{ヨウ}を、^{ヨウ}勉、^{ヨウ}め、^{ヨウ}給、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}秀、^{ヨウ}者、^{ヨウ}云、^{ヨウ}小、^{ヨウ}川、^{ヨウ}の、^{ヨウ}倫、^{ヨウ}を
く、^{ヨウ}ま、^{ヨウ}し、^{ヨウ}ら、^{ヨウ}仲、^{ヨウ}分、^{ヨウ}あり、^{ヨウ}と、^{ヨウ}感、^{ヨウ}一、^{ヨウ}か、^{ヨウ}よ、^{ヨウ}ち、^{ヨウ}洗、^{ヨウ}ち、^{ヨウ}茶、^{ヨウ}屋
より、^{ヨウ}十、^{ヨウ}六、^{ヨウ}町、^{ヨウ}も、^{ヨウ}上、^{ヨウ}に、^{ヨウ}岩、^{ヨウ}橋、^{ヨウ}の、^{ヨウ}使、^{ヨウ}も、^{ヨウ}一、^{ヨウ}お、^{ヨウ}あ、^{ヨウ}あり、^{ヨウ}増

田右衛門尉も、^新茶屋と、^新あ、^新ら、^新く、^新い、^新後、^新一、^新つ、^新い、^新又、^新子の
御、^新存、^新示、^新政、^新下、^新あ、^新乃、^新旅、^新館、^新局、^新の、^新お、^新り、^新あ、^新の、^新り、^新お、^新石
あ、^新ま、^新く、^新あ、^新く、^新て、^新ら、^新り、^新と、^新や、^新午、^新後、^新ま、^新及、^新り、^新い、^新ま、^新
下、^新も、^新た、^新り、^新お、^新せ、^新ま、^新り、^新ま、^新折、^新や、^新は、^新ら、^新い、^新か、^新て、^新い、^新将、^新家、^新
脱、^新り、^新あ、^新く、^新い、^新湯、^新を、^新の、^新せ、^新つ、^新い、^新氣、^新を、^新か、^新り、^新い、^新ら、^新く
も、^新な、^新く、^新い、^新湯、^新と、^新ゆ、^新一、^新給、^新ひ、^新て、^新た、^新い、^新膳、^新と、^新い、^新ま、^新
く、^新一、^新つ、^新い、^新よ、^新げ、^新よ、^新及、^新ま、^新て、^新増、^新田、^新は、^新い、^新あ、^新ら、^新い、^新ま、^新
より、^新い、^新ま、^新さ、^新り、^新と、^新の、^新ち、^新り、^新ま、^新あ、^新り、^新い、^新ま、^新ひ、^新つ、^新い、^新湯、^新は、^新い、^新
ま、^新い、^新所、^新屋、^新身、^新高、^新賣、^新の、^新物、^新と、^新い、^新ま、^新ま、^新て、^新い、^新ま、^新ま、^新ら、^新い、^新
挿、^新針、^新紙、^新糸、^新や、^新此、^新地、^新を、^新り、^新ま、^新ま、^新裏、^新屋、^新

タカウカニ
キヌイト

八

善哉哉けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 心ののりおかり書院は義教の子昂の書院蹟
 我等の物の三蹟に歎書に谷合の沢と云ふなりけり
 さらさら吉と云ふなりけりけりけりけりけりけりけり
 東より谷と云ふなりけりけりけりけりけりけりけり
 くぬしと云ふなりけりけりけりけりけりけりけり
 下はは等花よありけりけりけりけりけりけりけり
 護花院乃教句よ

五一のりおかり書院は義教の子昂の書院蹟
 我等の物の三蹟に歎書に谷合の沢と云ふなりけり

将秀おつりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 人形とのせ客よありけりけりけりけりけりけりけり
 唯人が疑ふなりけりけりけりけりけりけりけり
 と云ふなりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 と思われぬ。あまき屋のあやけりけりけりけりけり
 し相林乃の氣婦なりありけりけりけりけりけりけり
 善哉哉けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 ぬ。けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 秀者云々よせありけりけりけりけりけりけりけり
 終り。

評曰徳昌院氣象はひよく大徳と申さ
 して其徳くしき事なき強く不勤なり
 中委中東大徳を捕茶屋に映日よ及毎
 と勤く勤せしは徳く徳勝の用をたし將軍
 乃茶屋に成せしき言勝ありし意をよと
 侍しし大徳よ悦ひか上せし政事及し和
 比しし其徳も徳勝ありし徳勝は
 中しし徳くありし申し各將茶屋をかよせし
 吳屋をたし其徳をあり又おんたつたも
 已何ともく衣香撒^{ハカク}茶^{チヤ}一しをよたし

方しりの持おきし持家るしふあひくた
 うちくちし下りありしゆくと徳体は
 つ徳無しし徳後しき事し徳疑之事し
 所ははし七徳所牧勅吾徳茶屋はし
 を費ししりハ徳勅吾徳玉徳の長同徳
 ちし徳徳とらしり鞍馬のありし
 徳所しし下り岩はしし徳と手水し用ひし
 其の身と徳とありし茶屋はし徳後し
 せまふしありけし茶屋はしし
 乃編^{ヒト}戸^トとら茶屋あり又町屋をくまの賣

之ゆゑおひたす。今度お下之慶院弟の
 池まゝのつらなりと。珠勝たまがたけと号す。新
 知子立百名寄附。治下。西日野之千村初院
 寺村カキヤ並村小野村あり。春秋又お粟入の境
 ありと。即ゆカキヤ諾ましくして遷御ありとあり。
 翌日圓縁と。醍醐之ちと。門かこりし。再今
 なる供の人。治下。八幡山は穀山を宅岩山等と
 寺院をこし。方し。つらなり措物と。か。治下。伏見
 大坂と。善信ありし。酒肴サカベ賜ましく。終カキヤ勞紙
 報。治下。あり。

評曰と。交花見之事。三月十日又日たぐし
 と。通くの内定し。と。し。上旬の治下
 風あり。ま。く。つらなり。つらなり。延治見
 屋の。さ。く。は。く。ま。し。や。よ。十四日之
 言。つらなり。晴。よ。起。る。十六日乃曉天まで
 多雲。よ。ま。つ。午前より。ぬ。ま。ち。ら。つ。せ。ら
 比。ま。し。ち。つ。た。ら。る。み。か。り。つ。ら。なり。ま。り。ま。り。吉。吉。云
 乃。述。天。感。の。及。ぬ。ま。し。事。ハ。後。も。あ。ら。う。し。
 一。病。く。夫。か。ま。し。一。本。田。和。泉。寺。記。よ。ま。
 け。事。ハ。天。を。く。ま。り。感。一。ま。り。屋。く。し。記。

竹

[Faint, mostly illegible handwritten text in vertical columns]

遊擊軍將軍日中每演之事

大的正使參將謝用梓竟岩副使遊擊將軍

愚兩人小西橋津了回和みく八月晦了至之辰

せく正使ハ羽柴使前中洲云秀家所少く

遊擊の副使ハ蜂谷賀阿時也所行て

とるり九月朔の御礼上上良大の

帝ハ御侍和束紅景衣叔神紫緋之口

鞆書

生物

孔雀

麝香

白象

黑象

馬

唐太

大宛記十五

四十

織物

金欄

百疋

倭子

日

後百疋

錦

二百疋

襦子

二百疋

早後

二百疋

虎皮

二枚

豹皮

日

唐草

日

唐皮

日

釋皮

日

大宛之使使宿中御城まで列列ハ唐の家
物にのり蓋を掛し。御筆筆葉給を
靴さとの鳴地やぐ。幢をさくせくあり
子登敷に御射面良郷食膳給御茶

る侍りし御膳之河系旨あやうし御礼取け
ろいまに多し。うらち取を立依見とさして
に午の刻もるをるがらわさる。平方にゆりぬ
歩躰も大ぬたより依く返る。五日の日伏
月と表六日御城に作る亭郷食膳下を後
及舟人をも後けり。御貝の刻橋をさうけり
後にに冷を銀堂をさく。御舟の御舟
の屏風帆帳御舟の御舟と御舟と御舟
及と感一より行りてを後。揚すり
やと十里一地一冷。御舟と御舟と御舟と

大宛記十六

四十一

庚

之よりまゝ一麩子の沖振也ハゆくまづつらひのまゝハ
ゆハくハたハけハたりハ羨女とハ十ハ五ハ人ハ晴ハりハ也ハ。耀ハるハり
たりハ衣ハ袋ハやハくハふハやハいハかハまハせハ給ハひハ病ハんハやハち
花ハのハうハがハせハ凡ハよハあハくハくハ柳ハのハ姿ハをハ云ハはハくハ一
經ハてハ沖ハ回ハ宴ハ始ハりハくハまハ今ハをハのハ小ハ款ハまハでハ一
屋ハうハまハうハくハ時ハくハ一ハまハでハおハけハまハのハ唐ハ使
もハわハきハわハくハまハくハんハくハまハらハりハかハくハてハ沖ハ葉ハとハ枝ハ志
くハ人ハ。施ハ善ハ院ハのハまハおハにハくハ沖ハ葉ハ終ハ下ハけハりハ小ハるハ田
まハくハやハまハけハらハのハ同ハくハハハ小ハ猪ハのハ所ハくハくハ。おハいハ海ハのハ所
くハくハまハのハまハあハまハのハ一ハまハハハ興ハあハるハんハくハ一ハとハなり

又使感收一沖恩情に依ハ能ハ音ハ好ハ樂ハ一ハ世ハ乃
初ハ上ハたりハ一ハまハのハ音ハ口ハとハ得ハてハ足ハしてハ立ハにハり
秀ハ吉ハ云ハ朝ハ鮮ハ之ハ帝ハ王ハとハ夜ハ朝ハをハ給ハひハ一ハらハり
版ハ立ハ給ハつハくハ。大明ハもハ朝ハ鮮ハのハこハとハまハ。虚ハ瘧ハまハく
まハくハ也ハおハりハ一ハもハんハ今ハ夜ハハハ所ハをハあハりハもハまハくハ唐ハ使
まハもハあハ給ハつハくハ早ハくハよハぬハ一ハまハのハぬハ大明ハ人
らハ今ハのハ音ハ余ハ人ハあハまハくハ下ハ一ハまハのハ八ハ日ハよハのハ傳ハのハ傳
一ハまハのハ六ハ日ハよハのハ傳ハのハ傳ハ一ハまハのハ六ハ日ハよハのハ傳ハのハ傳
一ハまハのハ十ハ日ハよハのハ傳ハのハ傳ハ一ハまハのハ十ハ日ハよハのハ傳ハのハ傳
一ハまハのハ十ハ日ハよハのハ傳ハのハ傳ハ一ハまハのハ十ハ日ハよハのハ傳ハのハ傳

一をりせり。唐使三回つゝ。我有御札。と待
らん。と云。信田國轉し。けし。ハ。唯。帆。と。奉
孝長元年壬辰九月十日。信田國。と。り

(Faint bleed-through text from the reverse side)

去佐國寄船之事

去別部寄船。居城。ち。よ。かの。毒。かつ。渡。字。所。
戸の。隣。より。十八里。渡。し。夥。し。き。大。船。共。を。去
年九月の。寄。もの。旨。を。致。す。我。部。さ。く。若。葉
一也。右。船。を。佐。立。の。人。せ。に。け。り。け。ま。ハ。南。重
國。より。の。ひ。と。ご。ん。と。云。國。高。買。の。た。り。海。上
舟。子。て。け。り。け。り。海。上。舟。子。遇。て。拵。拵。船。換。し
袖。先。より。握。入。水。に。溺。し。る。者。死。す。て。い。死。す。て。是
坊。二。百。五。十。人。志。人。い。よ。ろ。十。人。余。高。人。亦。人。件。
五。を。ぞ。外。立。百。人。余。る。ろ。ろ。と。云。と。云。り。國。を

河津島。水と波下いへり。とる。一。や。も。為。我
部より水向儀。揚着十廿五。白米。中儀。是
賜ある。かくて。馬身。上。番。船。二十艘。付。を。馬。羽。之
日十日。増田。右。惠。尉。方。人。花。洞。檣。を。首。P。と。し。て。六
將軍。事。外。なり。御。杖。様。ゆ。く。ぞ。を。け。ら。右。惠。門
村。と。し。て。為。政。之。と。し。て。波。留。付。し。る。と。也。船。下
高。く。ち。り。せ。り。み。の。船。一。舟。の。大。き。を。大。二
よ。く。せ。り。六。舟。の。事。三。十。舟。様。五。二。舟。より
揮。の。入。り。宮。の。廣。さ。五。五。五。布。八。帆。の。様。を。り。ん
の。真。極。ハ。風。の。た。り。し。切。り。し。と。り。船。を。た。る。五。三

り。し。金。さ。り。や。か。く。て。船。中。を。改。り。し。む。と。る。一。時
廻。轉。の。者。さ。し。も。是。と。様。く。何。故。一。強。く。五。六
十日。も。河。津。入。一。舟。様。入。り。時。め。け。れ。り。し。り
い。そ。て。そ。の。時。の。積。り。記。を。わ。け。け。し。八。増。田。船。を
旨。と。り。さ。さ。か。り。者。の。云。け。ら。八。積。り。記。を。外
私。物。に。か。か。る。の。積。り。物。多。く。を。一。と。り。り
也。増。田。船。は。け。は。は。な。く。面。を。入。り。と。く。し。し。事
を。り。し。る。入。り。り。と。し。し。と。白。腹。せ。し。く。ハ
お。も。や。り。た。り。り。を。白。い。は。な。く。信。取。え。親。館
子。の。く。げ。是。船。の。一。艘。分。ハ。帆。帆。の。少。船。り

仁子横大後へ氣をきぞ。劫奪して先松を
 奪めんとえ親へつけまへ。遊辭又商人が
 とよひせ。穿牙殿金持しくらぶ百廿艘
 上横のりんとPくう。さうぶ道に海をぬり
 よる松をよせまきと。せ盛し法一をいへ元
 親松をのたにを首P付。ち別の浦と改ち廿
 艘せぬ。ちおの廻船と総りんとせ。何故持松を
 ぬく。ちまのちけりけまへ。八十艘乗事とぬ。日九
 月廿日とぬ。海文のち。清取くる。十月二日にち宛
 平。かゝて増田も翌日と日百廿艘とる連と。

けさ海くちりけり。廿所許行か。せもを吹風
 子ぬく。廿日の候。大船と着上りつに海文を以掛
 目か。ちち船況船中とせまけり。

海文

とく 襦子

ひまき

五万疋

唐木綿

二十万疋

金襴

鈍子

五万疋

白糸

十萬疋

カント

子廿日 四部とる

鹿射香箱

一但二人持

一 生らる鹿射香

十

一 生らる猿

十五

猿シシ之輔車尾長く鼠尾に似る

一 鸚鵡

二

夏下の文と首御覧ましく之[△]林申へ生らる鸚鵡

能一二人持の麝香粉一金襦洗子二百疋持之

之外持家法花法候大吏御尋世等中尋に毛

てそましくに懸一水配とおひさしあるのり

るしより。再京博と候事良乃町人等もしは

何事も子さりのたりもあはれ部よハ銀子五子枚

外色に法候るこ子下家中ハ長きに御配當る

増田子色銀子ハ百枚再何事もこ子種と辨候所

黒船乃者者こ枝持市八百人分酒肴薪毎日五百

人之御下御事とそまけり船大工と右邊御付

本ノ人御事とあし一好まけり船工と黒船を修理

さる世よと被御付一十月より明年三月まで

てお事御り一より圓之被御之御御上はけ

ハ二入物を御文を御くしより御り一御上は

たより一圓之御文を御しと名盛御事御り

まハ八米五百石少く百石千石と御事御り

十一本有大
用記卷
第十七
目錄九
字

久しきに首被痛き、交白米子石少く二百七難
二千箇大橋百粒との着五十荷餽飽之粒五百石
一石之下約旨被作書し、増田野也、早建お洞
海一傳、事外系存記せし、越上上三月初旬
海朝子赴きにあり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

前同白秀次公之事
登田廿持忠志之事
秀次公御切腹之事
御切腹之事
秀次公御切腹之事
御切腹之事
秀次公御切腹之事
御切腹之事
秀次公御切腹之事
御切腹之事

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

大周記卷第十七

南菴道人重撰

○前因白雲原云之事

作因白雲原云尾列之太舟たり一河上ハお替り
之下之流家督と禮法にてより漸切に
アガリく。義ありさうにたしむるは練心
らまこと雅をたう流翔在月に累り年
海傍と下大さうとと物なり。麻笥よと
立出させ給ふも。兵具をひそふ持せ給ふ
或をこれ給ぬ所。何の向く人々一は
乃人にも具足甲と挾殺にかく一合流用と



樂之志は音かしくしり上りて。秀治公被受召在
叔も存知しし事と形地取れいりてか
屋うたう金とて存立いふか。高城に在事し
所着皇と外他あり。七枚つきの指紙持てり音
又され事たをいひ。急い結し事らんて。吉田侍
従通治を先して往かると。宗より種男の毛色は
つ計し結し事なり。秘心存貯んて音被作上り
り。使名結を付て依りて立坂に御前被病をけし
もたもあそむる事な事と定まて。まづ一性
めしたる事あり。秘部とて下も打たんとて悦

あつらぬ事お節本村を懐介の定し所喜徳とめ
はしる事あり。何事にくや有争ん。如身ありし
のり七月四日此夜聚樂にありて。此夜あり。奥
へかありしに家あり。下部とゆふ事あり。秀
治公此目にかつて。宗に定へ取しり。
評曰。常信介又ハ本村尊人依りて。將軍死
立之大局也。常信を中子なまは。高城とて
柄を取し。宗をとりけし事。之歳に本村を
かひもなき事。形取たりと因て。秀治公へ信
とてめさし出。坂の信にんえり。増田石田を

して徳大長をわたりしは、いふに、^二西^一結^二區^一をり。はる
 何れも、^二出^一つる。堀尾の意とて、あまの。秀次公之
 右の、^二藤^一中^二ち^一く、侍りつ。いふも、^二侍^一り。いふ
 いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 吉田修理室、八幡別、芥川郡、一境、つるを、^二侍^一り。
 かつ、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 も、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 是、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。

一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。
 一、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。いふも、^二侍^一り。

しりやまの好む位之の身となり。喜義ちにお
らまう。終よ。といひ来の事。さへおつた。なま
れをまひぬく。いそあひれたり。申秋らとあのみた
た虫乃考もまゝ。ひり。にまう。つ。終肝乃月
と地まひり。

○蓋田女侍忠志之事

ま頼。秀次云。若君を。再。の寵^{チヤウ}。乃女を。ま
あま。三。二十人。解。回。八日。之。秋。酒。永。或。乃。は。原。下。
を。う。入。ま。ひ。り。ま。ひ。り。せ。あ。田。始。音。流。田。中。吾。部。

大捕まひり。く。毒。と。流。と。め。よ。かり。か。く。て。た。る。丹。列
飛。山。之。城。へ。ま。く。つ。ま。す。り。の。世。望。く。制。法。物。上。記
付。親。一。ま。か。い。よ。り。の。ま。と。つ。ま。ま。上。思。ひ。強。一
たり。な。ま。う。く。攻。京。お。り。一。海。一。て。洛。中。を。後。一。六
条。河。原。舟。一。て。ま。ま。く。く。ま。ま。害。に。及。ひ。た。ん。と。ま。り。
蓋。田。女。侍。は。事。一。と。ま。く。志。ま。り。り。さ。り。一。ま。ま。事。乃
ま。ま。く。痛。一。ま。ま。上。あ。ま。う。く。ま。ま。や。う。た。る。事。
事。と。ま。ま。の。ま。ま。も。ま。ま。何。く。ま。ま。人。地。り。我。は。り。と。江
別。淺。井。船。舟。一。て。舟。形。ま。ま。之。門。流。小。菴。と。樂。一。ま
ま。一。塔。ま。ま。の。り。一。ま。ま。秀。次。云。大。下。之。家。督。と。流。

ませあひてより。某と三喜の之内は加えさせ給ひ
報ホウしてし報ホウかへさるべし。且よあくはあ
いさ若君を連べと刀血を家と号し。飛山は素り
何しきし。あろし。尸さんと。移さく思ひあがりか
て一人を。日あとい。素新母義へ教をまうし
し。つる屋し。七月廿日。又坂へ下り。くら。書あ
事ハ飛山よりとのた右治才上坂井太良右衛門と云
し者よ首をとねし。し事。はくも。露ツラ減とるあよと
せし。と。かせせう。和と。こめつ。若狭行くも。宿
と。出く。飛山。い。を。さ。け。り。に。た。ひ。の。坂。し。て。其。上

多くまきく。乃。道。乃。より。下。人。も。と。や。と。と。へ。り。さ。は。首
お。回。始。り。宮。院。増。田。右。馬。尉。石。田。治。才。上。坂。井。太。良。右。衛。門。と
て。返。攻。し。くら。さ。ま。い。ハ。飛。山。よ。く。わ。若。君。と。ら。お。て
し。と。一。水。着。集。り。く。寛。急。志。し。ん。く。く。め。坊。集。せ
し。折。を。と。ま。ま。い。ハ。れ。せ。り。し。久。き。け。き。り。柳。ま。く
さ。り。し。た。く。い。ひ。と。人。は。流。義。志。た。り。と。と。赤アカ
色。と。ま。い。く。と。や。し。ま。身。ハ。し。り。く。坂。し。くら。
折。を。と。持。ゆ。り。し。者。立。攻。り。し。ま。く。若。君。を
ま。い。と。秀。く。あ。ら。う。し。飛。山。ハ。丸。い。と。し。こ。め
ま。い。せ。ゆ。り。く。ま。れ。く。く。屋。う。た。り。ゆ。り。の。も。と。云。之

九つり不入りををさハ、サ約思ひ延せり一也
 諫曰。夫関白職ハ諫コト。國コトなり。わとわん云者
 利事外之職なり。將軍多人と。選得
 らんと。天下俱しハ職ニ委次ト。諫ヲ治ス
 私ナリ。私ト云ハ。私ト也。地理外天子ノ宵
 あり。何レも眞ニ得ル。あり治ス。云ハ也
 私欲あり。事小。大ナらも。まク也。私ナリ
 け末業。えん人。表ニ也。凡テ義ト送
 て。子孫ノ業之。計上。存ス。警ホ。一ト
 也。天ノ。治ス。古ト。比シ。後ノ。絶

多ク。守リ。官職乃。人を。撰ル
 信長。嫡孫。後々。後々
 治リ。事。を。ゆ々。毫に。何レも
 と。乃。在の。固公。且其。一リ。何レも。撰ル。
 御。治ス。私ハ。撰ル。
 或。老。人。曰サ。私ハ。撰ル。関白職ト
 兼院。り。ある。道九。二一。家ノ。道一
 職の。人を。撰ル。と。是ハ。撰ル。職人
 たり。報を。田ノ。表次。をも
 手上。廻リ。来ル。故ノ。何レも。呼ビ。おろ

一、其事をたらし、執たりのハ委吉公之私人
 七、うらぐ。委次の内自職と守りたるありしに
 突ハをたらし、盤觴して私一、周公曰、公
 何の治新。曰、昔賢わ尚功。周公曰、後世必有其弒
 之、信之、公曰、固公何の治魯。曰、昔賢わ親親、公
 曰、後世寢將矣、果して之を云のこし。乙下國
 之治乱、公をたらし、能甲之、一、國自職
 主、人、撰ぶるハ、善に翅たぐ。前者、一、相たぐ人
 一、祝たぐ、きりや。一、國之諸國之治、さ、之、要
 失あり

○委次公、泚の腹之、之使、堂山、之、事
 史惟、之、大、之、遊者ハ、智深く才、是、也、たり。委次公
 在、世、一、治り。埒田石田、之、身乃上、何、り、あんとを
 一、過、一、誦、誦、之、上、功、一、將軍もあ、り、く、一、く、也
 堂、之、成、中、も、あ、る。守、ふ、た、も、有、人、一、と、お、や、さ、せ、り
 くり、たり、あり、腹、之、功、を、く、と、く。福、徳、の、た、恵、を、史
 福、原、石、馬、の、池、田、守、ら、も、拾、使、と、し、て、委、次、を、さ、せ、り、り。
 け、く、委、次、之、の、治、を、け、せ、り。委、次、公、叔、ハ、衰、弱、を、り
 之、の、治、を、た、り。げ、者、を、ハ、我、之、射、一、恨、者、を、た、り。
 枝、體、人、も、よ、し、に、あ、り、人、の、治、を、も、り、階、を、堂

一射 兵を治ひぬ。西堂ハ志中ハモク母瑞龍院
 受之事。と後ニ世トモクニ計ハハモクト作事
 進ス。是ハ所仕ハ人ト粟野ハモクト所ナリ。
 美事ハ宛事猶モ少菴之義モ。ト起上ハ信
 所出ル。故ハ毎所ハ人ト下ハ之義中ハ
 思ハモクトモクト。足踏地モ上モクト。モク
 公ハ之感ハ治ハク。故ニ使本食人ト呼ク云
 者然ハ。世園白受ハ切腹之義モ。人トモクトモクト
 書ガクモクトモクト。モクク。モク日
 為△所モクトモクトモクトモクトモクトモクト

依母多疑ク可殺進津切腹ク首作。地信ハ
 之罷業人大師。故モ津モ然。ゆモクモク
 能モクモク射モク。又モクモク逆信極重之罷
 過喜所容於天地之間。然ハ大師何ハ故。故
 有指形之。心乎願。子モク人トモクトモクト
 主者被お違ク早速ハ可殺及モクモクモク
 之使ハモクモクモクモクモクモクモクモク
 謹云

文禄四年

七月十九

徳善院言ハ

名乗大徳大補

石田治教少輔

増田右忠少尉

後醍醐天皇

本食興山上人

同十のりぬる上人技師と稱見とれし事
由事とかりしに及まじ。能く思ふ事
とらあまハとらく其あり。寺法ハ

く大のされぬの及一山高き証議と役人を呼
よせ於金堂に議判之價息也有り。山及高き
寺法を立御切腹と可敷と時いら守り方
多く又此等の書勢之趣も道理務せり。つ
あんと云高徒も多し。匡也三使の方より本
食と人より何と及まじ作年。子連書と被ね
宛二の宛のりんと使去爰使とせしそれなり。と
人より出り守りし。寺法も高き同出有てこそ
のゆたかき。若しと違背難候せし。びし二及被城
いさよ六御切腹とのお救之。弦操。まきて寺法も

破す。用らる秘法北坡城郭をん所強軍人也。借い
そふ。成切腹しお務て然りんと。其情りよふ。守
利と人初の名におうりり。慈悲人をとて。義を望
し。利をばりんす。地をれ。まを古く。高乃首を別。宮子
二人。殺し。後優は安塞の身と。後。月。金欄
之架ゆ衣と掛。中。六。磨埃と。南。八。科。款。じ。ひ。と。と
やと。悦果。なる。り。の。り。一。支。一。守。に。た。も。是。ぬ
そ。考。と。人。が。は。り。と。め。う。ま。人。足。ら。ら。ぬ。真。さ。め。に。く。り。
あ。う。ハ。あ。も。と。と。高。時。官。信。ふ。ま。ハ。威。た。く。南。く。ひ。ひ
俗儀つり。のり。し。と。周。く。ま。義。は。出。も。を。と。と

猶。考。治。云。救。年。の。慈。情。う。つ。つ。事。の。こ。多。く
ゆ。り。一。一。板。も。人。也。人。さ。う。と。む。あ。ら。う。ハ。さ。や。さ
し。く。り。高。橋。區。や。と。と。か。り。の。せ。も。も。な。り。り。一
う。ハ。二。使。も。親。之。子。餘。人。兵。具。い。う。く。出。ま。く。ま。ま
最。考。寺。を。元。と。く。と。打。團。こ。く。り。考。治。云。い。かり。給。し
て。指。務。な。り。働。や。り。あ。ら。う。と。切。て。一。の。出。ぞ。淡。路。也
給。め。ら。と。被。押。付。け。し。い。本。食。之。人。使。ま。と。ま。ま
と。振。返。り。不。死。終。な。り。と。そ。も。あ。ま。ま。に。成。腹。め。ま。は
る。ま。事。か。ら。し。士。の。格。を。あ。ら。う。と。け。る。澄。也。者
なり。也。自。ま。て。ハ。君。后。と。礼。儀。か。り。と。日。ハ。ち。法。を。不。用

と云かしく以て之に後母を乞は次弟よりと云はし
 とも人云使へ来よ次女。とても此股りき向へと首
 お極りたると云。一は之の法をよも此判のさく此國
 之終上事甚い粮糧なり。必ず此換炮より入る事を
 あらくしく割けし何もおそむいそて勢を
 まんと引さるり

○御切腹之事

秀波公かく成りしと一ありあふりとおけり
 一は之をまきいぬるしとくま。平なる此股腹の行進

八巻切水とすしとせよと被御出りし。朝之を志しり
 ちんどもやふりくまにくりぬお伴の面々しり
 此借よ必あるとに糸敷なきしひき進せ。同ハ此先
 系り度い。そても乃此事に外錯とあそけま
 被下いりんや。荏那に突一甲やと溢西堂をり
 一付むるり我手にかりしとさんゆり性よもあや
 ふ付人そそ。山平も後助十八國吉の内脇持と攻
 下くり項戴仕とつるや。あななくも左乃脇へ
 ちと右へ川ゆり。りんやと云し志けま。首も
 ありしを二巻の御守なり

是國播州之本
 くり十八才

あり後四良

の内脇指とお領一腹十二字にりき切く首とつけ
 一りしぐらにたし一筋つと三番不破万作生國瓦 別大志文
 母り信一五作よてつと疵つと中不考イカをまじり
 忠義をまじりゆるし一筋とそお領乃志のき若阿良にけ
 かく腹とつと一芝七流平にかりりしにかり。四重隆
 而雲ハ蒼勃ハ介銘をま好を守りてと考次某手り
 掛一甲と定ハハ可おなくかりませ世世を忠とく
 とも義よ及へて△△△ 五番考次公生年二 十八才 西宗
 之脇指ハ内心志りてと考次と替り一筋つ
 信とやうとよと被作しと十ニリヨギ 信游意こ云内腰物と

地九

以内外務と神妙よりは漢路書も為てお領と
 國治ハ心自害ハ介務ハ吉吾およしく被下り
 け蒼勃ハ特別尼流之何人信ハ備を解連ハ勇ハ類を
 絶せり。お後之裁判宜しく潤へとき君臣世の辨
 と内ゆるし一信より初ハ内他ハ矣よりし。と来
 いたしかりしと在依見と出くしりお兼コノカタ根乃
 ともめし病も君おにやうきりてと。守に育か
 とも信なりともは視一信りたり。福崎福原池田
 十六日之晩到平依見とも首被露一せり。考次公
 内面之事ハく信りんやとりてと。と出たりハ

かく本合上人の何人かとも切腹させ侍りし事。聊
其袖を志かり給へりし。

○同輩と号し切腹之面と

本村常徳介ハ橋列立テ彦大門前におわて切腹せり
り。目録ありつゝ心志を以テ刀脇指を以テ金銀を以
てしり。大崎を右邊射ハ侍共んと思ひ之が
心本村常介にて若く義よりおわてハ草陰^{カゲ}までハ深
く恨みし。唯と供仕まりし。名本村と討文^{ハチモロ}
のきく御給紙見せしめて位持ハ牛王とあらし。

相討せし事。其後此處までし。位持ハ金子

其後之は且場より。彦宗よたごを志し毎風

二之双母くかひませ。介^{カイニマ}侍人と二人入切腹せし

源曰^{マコト}密にいさし事。名紙行むの御り。

白江宿後書曰糸貞安寺に切腹せり同書案

道場におわて。貞害寺より一首くなん

心より深し衣乃つまたまはしとおありし

ちとれらるなりん

糸谷大膳亮ハ淺^{サカ}越二宮院并て貞害寺んと

思ひ。七月十日曉皮寺にむく。御門侍連ハ内より

たそと同し時付持人御用之事と云々あり
 志に似と云々し。何持人より申作しんと云々
 院内に入らば自ら達し。其家より出づ。禮入
 すと云々。まじりて用禮入より。能言又。悟亮。和
 へ討高し。志之休言し。依く。股之。信のたり。おそ。ま
 りく。之。在。成。寺。と。信。一。と。ま。ん。と。禮。利。有。堂。法。と
 て。安。き。禮。の。事。此。心。を。為。人。一。い。へ。一。用。用。之
 事。あり。被。給。付。之。と。云。一。一。能。言。取。り。取。い
 本。在。の。用。之。教。一。事。一。年。來。親。一。く。固。之。一。事。一
 七。た。り。ま。に。由。き。と。信。一。一。事。一。禮。多。存。い。是。武

い。ふ。ふ。り。一。事。一。ま。せ。と。も。黄。金。三。條。女。再。刀。編。持。指。之
 取。之。事。一。事。一。能。言。一。事。一。入。と。云。一。一。時。一。和。有。も。衣。之
 袖。を。志。ら。ま。し。と。云。一。一。能。言。一。首。一。事。一。一。記。一。付
 早

わ。れ。も。同。し。由。之。事。一。事。一。な。り。と。云。一。一。事。一。一。事。一
 漢。賊。野。一。事。一。一。事。一。一。事。一。一。事。一。一。事。一。一。事。一

弟の事。を。二。つ。方。あ。ま。酒。を。起。一。一。今。一。事。一。一。事。一
 か。し。も。あ。り。と。云。一。一。事。一。一。事。一。一。事。一。一。事。一。一。事。一
 粟。野。本。之。所。一。一。粟。田。口。吉。水。之。名。一。一。少。為。所。一。一
 考。次。公。孫。一。一。謀。殺。一。一。ハ。一。一。由。一。一。一。一。由。一。一。一。一。由。一。一

十文字にりき切く終りぬ

日以暫し野古山サ雲ハ少船を色におろせ切腹を
丸毛不心ハ相國も口あやしく老服あまハ志ハ事外
しりたるもて同くハ首を打くたい人ト云うてま
にくりまは一柳右左衛門初もして詔をうまひ今
悉く切腹被仰付ゆりきば謀反之事虞在^キ之^ビ宜^シク
終^ニ志^ス事^ナす^レ方^トお^ハわ^セり^書を^一人^ト人
も及も秋某ハ未だ^ハ事^ハハな^ク知^ラずと云人^トな^クが^事
む^ニま^ニて^疾に^赴き^わる^事。宿業^ハ乃^ハた^ハあ^らじ^きり^ハ
親^シ念^トし^終り^り。何^トも^事一^たり^し。事^ハ在^リあり^し



許白秀決云^終ま^にわ^いひ^しい^し一^一唯^一國^一白^一之^一
高^ハ職^トと^をり^しる^事。よ^ハあ^いひ^しあ^て。美^シき^事。遠^カい^事
は^らな^るる^事。天^ノ爵^ハ乃^ハた^ハ急^ク緩^ク黙^ト止^シて^知る^事。
御^上は^ハ也^ハ盛^ニ三^成り^終る^事。御^上あ^らじ^きり^ハぬ^事。味^ハ
も^有る^事。お^ハわ^セり^し院^ハ沙^ハ不^ハ崩^レ沙^ハ七日^トも^事。未^ダ也^ハ一^一
廉^ハ持^ルる^事。此^ハ沙^ハを^ハい^ハか^ハも^職。一^一遠^カり^し。ゆ^ハに^ハ
探^シ問^フと^しわ^らじ^きり^し。ゆ^ハを^ハけ^りと^わら^じき^り。わ^らじ^きり^ハ
天下^ト一^一な^るる^事。様^ハを^ハと^しは^らじ^きり^し。あ^らじ^きり^ハぬ^事。
いとゆ^りり^し。かり^ハ沙^ハ不^ハ崩^レ沙^ハ七日^トも^事。未^ダ也^ハ一^一き^り
た^らじ^きり^ハぬ^事。沙^ハ不^ハ崩^レ沙^ハ七日^トも^事。未^ダ也^ハ一^一き^り

小殺生抄の事なる殿山へ入。廉持を指
 指す事もなく。海をこれに鉄砲を多れと敷
 一。これの中はこれより高書抄より一
 院乃抄取らむ向れをりのかりな事は
 ぬれとせの事なり開白とつよ

同六月八日秀次公以殿山へ女房九と被石連山上
 一終る一晝夜の遊宴は心よりも趣の事
 まにけり。晝はむゆを待らる。夜はかき
 一と成り。廉持ぬらさきつ。心も終る。終る
 たるり。一山流傳し。そりきり。山山桓氏天皇御
 〇

草創より。殺生抄の事なる殿山へ入。廉持を指
 指す事もなく。海をこれに鉄砲を多れと敷
 一。これの中はこれより高書抄より一
 院乃抄取らむ向れをりのかりな事は
 ぬれとせの事なり開白とつよ

一六四
 一六五
 一六六
 一六七
 一六八
 一六九
 一七〇
 一七一
 一七二
 一七三
 一七四
 一七五
 一七六
 一七七
 一七八
 一七九
 一八〇
 一八一
 一八二
 一八三
 一八四
 一八五
 一八六
 一八七
 一八八
 一八九
 一九〇
 一九一
 一九二
 一九三
 一九四
 一九五
 一九六
 一九七
 一九八
 一九九
 二〇〇

一六四
 一六五
 一六六
 一六七
 一六八
 一六九
 一七〇
 一七一
 一七二
 一七三
 一七四
 一七五
 一七六
 一七七
 一七八
 一七九
 一八〇
 一八一
 一八二
 一八三
 一八四
 一八五
 一八六
 一八七
 一八八
 一八九
 一九〇
 一九一
 一九二
 一九三
 一九四
 一九五
 一九六
 一九七
 一九八
 一九九
 二〇〇

一六四

一六五

一六六

て天下に邪法と正しき人々を。國々ゆりの
 後なるに自法と有りし人々を。築村を再興
 するにあり。も因果を經もがうはへてと。あ
 せしむるにあり

伴曰石昧因果と云ふ。や又おれ自法と云ふ。

符節と合する。そあんなは。そあんなは

そよ。あんなは六月八日比叡山に登り。復精と云ふ。

よと。あんなは七月八日。あんなは山より。あんなは

あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。

は因果の行と流し。あんなは。或も因果の縁。あんなは報
 り。或も報の縁。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。
 し。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。
 俗の流るり。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。

○あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。

せしむるにあり

右にあり。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。
 妙補と云ふ。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。
 つらき。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。あんなは。

小二十万の方より堀とせり。麻植とゆいませり。橋下
 南より三万に堀とせり。津頭以西向より長を築
 お二十余人は其節をよもませり。首首をよもせり。此
 一とせり。二日乃ち約は是れをなせり。此河原より者た
 具足甲とせり。方方より以援持り。よもせり。此
 実清もよもせり。飛来も西門より西地とせり
 此の河原より。津頭も此の河原より。丹列も此
 小松も此の河原より。七月晦日小法永或々法永も此
 此の河原より。此の河原より。此の河原より。此の河原より。

とうとせり。乃ち小難の勢をよもせり。八月朔日の
 空も雲乃ちまがせり。此の河原より。又此の
 さましらの橋をのよもせり。使の女房も此の
 此の河原より。此の河原より。此の河原より。此の河原より。

或曰。思はく多く此群想た。秀次の方寸よ
 此の河原より。此の河原より。此の河原より。此の河原より。

ハジキもいふにあり。り年二十二年
 二交の^本渡反の少後遊めくたも事也。増田石田
 うさくま。かくをせ終事のあられ。是れも
 なくありてかゝる

ふいもあぬうごま ねまこまぬ
 つまひかづ家母と成りたり

おまの方十二番 一巻の息女

うたいたねや子のわきとまーか
 甲一やうにーゆもまけーさ

おまの方十八又 法列行中息女

時志ぬ花のあーしーしゆもねく

のうぬめとぞ 成に守りぬ

お辰の方十九才 瓦列台少女と息女

かざりあもやなを恨えんか
 うつに來りうつにぞま

おさこの方十九才 小登松橋流り安若君

あーさくかそつろろ 上と 里よよし
 さねのりあよりわきそねーか

中細云の方廿四番 杉列小湊安息女

時多ぬ 常一の 向地さそひま

花をりみりし教りける那

おほ海の方を才心兼安津良女

あまなすれ罷りあつこのかぐこら

くろも原代志原をりくろ

おほ海の方十九才奥列モカミ上良女

うつとも夢とも知ぬ女の中

とまぎぞか原白川の水

あせら後世才秋庭後良女

あま世の白川の水こそそとれて

そこのうらりとたらしか原

おあこの所方廿二才原列良女

わきむとらき書ゆくさくつもの

あやしを先と何とくもらわら

おさおれ四方十才原列良女

消て越く男ハ中く一長あまや

あま原行や乃さぞねふ

お酒の所方廿二才尾列良女

君花女をみりかりくろ白川

あよりの所方廿二才尾列良女

子代までいかりとて思ひし
うらなかりふまやん

お茶田方十才 橋津國伊丹兵衛次女
先づいもよくゆき色子多たれや

空よりと出く空におさめり

お牧田方十才 汝友吉兵衛村息女
妻おにきえぬは身にいぬ

のこまは母乃こころそと思ひ

おあいの田方十才 吉川之膳息女 京前也

おとりどしすこをあむ身はほく

かけそぞたのむ回ららと

お竹 拾子

夢のしもあぬうと世くしすれとあく

又あぬをりゆり魚うたり

おるあれの田方十九才 浪別坪の若海村息女

いふし何うとせん 難波ぐく

うらりもたれ夢乃を中

お友田方十才 大草之河もん是父母に

まるいえゆりく結さなほり

いふせん親に あえぬうとあえ

うき世のあつさくらをりけい

おさく、のあま 生國江別

咲はら秋花の秋風立りけり

あまりもあぬ森くえの露

お膚の方 廿五才とむ茂世中 羨徳号息女

限りあるあまの雨乃 ぬきあふ

毛しうりり人毛さうり

おさく、のあま 廿五才 糸列丹和 息女

生世とて又くろくし みるをね

雪乃ほきやいともか

おさく、のあま 十九才 江別 輪江才 助息女

毛ハ儒道ビユウダウのあま 廿五才 同地一也

ねハたご 毛さく、のあま 廿五才 ねま

出月日乃入りまうせ

少婦 生國越あ

毛地乃 毛あひだより 生世とて

おあ、みる中 海う 魚う たり

おこら、のあま 廿五才 毛上、のあま

かきさ、あま。毛く、なれに 書あ

あハ白川乃 淡と 清わら



左忠のかり廿八才 河内國墨江郡
 母よりなり。あま下りの美田用人也
 中くよ花の切とにハあり様とも
 けひなき風しさをくれとくり
 右忠のかり廿八才 播州村吉右忠村妹也
 ともゆきと此西國へいそやま
 西法の船のさやゆくはま
 おと 早王は列言鶴と女生國と名
 とよとかりま 中 神女より
 何事あり。ごりにあつる今まもや

けいもあつれと帝そくしくり
 東政 幸一透列丸毛不ぬぬめ
 夏れまふ。さ中あまらる。秋とあひく
 まよりうさ世に思ひのことさ
 右の款のかりて思ひをり終りて。御も
 一層ん。一巻に侍りて。おさ終りたり。
 心あつる邦人より先にと思ひかこも
 くるく。ち力取のま、急終りもあり。又人よ
 利あつるとわく。一なるも有く。さふく。れ
 に哀なり。おんつらと刃居やま。中終り

飯男乃早もさ海より心も何くけなく刃え
 ーり。さしうくーき若君と狗子と元りさくは
 やり地。二刀さーい。母義を外一回
 鳴主給ひかり。心家人さうれ袖も折る
 勢早と係早も理より。之案にたると給ひ姫君
 母にお居乃山うふいたさつき。我も害ー
 侍りかとおせけまは。南守は随ととた
 以上父国白敷に居てあひ侍りぞとて。念松
 ととちうく。うわることた十篇さうり唱早ま
 ーり。このり。利を久ー。あけたま。河

原乃者を云あう。たやーあ。切ま給ひても
 叶ぬりなりとて。母上の藤早より本守早行く。さ
 二刀さーて投早まなり。まさひく。給早なり
 母と心もま南とひ給らん中を家入。たもねく
 ーてまつく。我も害早ー侍りまよとて西とじひ
 路のハ市首ハあま在。刀乃同しとまさく中
 肝早勝早も消早くそわまう。移くそ。是も守り
 くら八九人も書ー。くまねとわ君乃上は折
 る。袂けまは。不心り女番走りより。関白早家
 之の子とよか。あまさ。かき。給り地。

亦くたまり之んまうと。我子^シの^カも^シと^ス。引
り^クら^シ割^リ事^トも^ナ有^ル也。其^レ固
果^ニ報^スひ^テも^ク。若^シ君^ナら^バ乃^チ亡^ス後^ニ哀^シい
たり^ト也。多^ク葉^ニ毛^ト更^ニ上^リか^クり^クら^シ。さ^レも^シ枝^ノ紂
り^ク忠^ニ良^トと^シ焚^ス炎^ト一^ニ孕^ム婦^トと^シ割^リ割^リ也^ト。悉^ク始^メ
七^ノ紡^キ綿^トも^ナり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



去^レ後^ニ云^フ謀^ル反^シに^シと^シ。去^レ流^ル乃^チく^シに^シ延^キ喜^シ流
去^レ朝^ニ紹^シ也^ト。眼^ニ望^ム才^ト安^シ志^ト亦^チ不^レ大^ニ悟^ル亮^ト也^ト。た^シと^シ
去^レ後^ニ云^フ謀^ル反^シと^シ思^フ之^レ治^ルる^ル也^ト。か^クる^ルの^ル人^トと^シ
之^レ使^メむ^ル也^ト。寄^リ治^ル人^ト也^ト。各^ノ所^ニ反^シ逆^ス之^レ子^ト。柳^ノ以^テ不^レ
去^レ後^ニ云^フ上^ニ度^ニ思^フひ^テ治^ル也^ト。世^ノ盛^ル之^レ成^ルが^レ威^シと^シ忍^ビ
去^レく^ル取^リ次^ニ人^トも^ナく^ル也^ト。人^ノ持^テ國^ト一^ニ行^クく^ル配^ス也^ト
赴^ク一^クり^ト。又^チ國^ト人^ト新^ニら^レ一^クら^シ。

- 一 柳^ノ右^ノ子^ト柳^ノ登^ト
 - 一 同^ノ妻^ト子^ト
 - 一 服^ノ於^テ室^ト也^ト
- 越^シ後^ニ寧^シ桐^ト

同妻子

依漱左邊作

明石左在

赤野但馬守

同妻子

長子初雲守

吉田清左邊尉

依作右邊左史

中早川左邊佐

中村或子女補

同人

同人

玄朔紹也安志、後下所被免を、なり。此の、
切腹被作付了



21

